

先週の御言葉は、霊的なものと肉的なものとを対立させるものだった。今週は逆に、霊と肉は分かちがたく一致している、という御言葉を聞こう。福音は決まりきった救いの型には納まりえない。

漁師であるペトロやゼバダイの子らを、最初の弟子として招く場面(ルカ 5:1~11)。漁民の日々には豊漁もあれば不漁もある。昨晚は不漁だった朝のこと(5:5)、漁師は網を洗いながら、群衆へのイエスの教を片耳で聞いていた(5:2~3)。

そんな漁師にイエスは、再び漁をせよと命ずる(5:4)。網は片づけちゃったし、評判高いラビらしいがド素人にそんなことを命じられても、とシモン(ペトロ)は困惑した。とはいえ投げやりな心持ちで従ってみると(5:5)、驚くべき大漁だ(5:6~7)。ここで場の空気が一変する。

ペトロはひれ伏し「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです(5:8)」と言い、仲間の漁師も同じ気持ちだった(5:10)。彼らの何が罪深いのか。与えられる恵みに対して「ド素人の気まぐれじゃないか」と、うんざりしたことを悔い改めている。

当初は「先生(5:5)」という呼称だが、悔い改めてみると、自ずとひれ伏し「主よ(5:8)」と、神への呼びかけのごとくに変化している。

イエスが「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる(5:10)」と告げると、「彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った(5:11)」。

魚獲りの漁師が世の肉的な仕事なら、人間をとる漁師は神に従う霊的な仕事なのか。それでは、肉的な世俗仕事よりも、霊的な仕事が重要なのだろうか。いや、福音書を眺めていると、霊と肉は対立するものではなくむしろ一致するものじゃないか、と思えてくる。

真の愛と恵みは、霊と肉の両方に働く。そして私たちを「自ず」と動かす。

代々漁師のペトロは、夜の漁で獲れないなら朝網を降ろしても無駄だと分かっている。だが経験に反して「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい(5:4)」という命令に渋々従ってみた。すると大漁になった。

神の恵みは、理性や経験では測り得ない。たとえ疑いながらもイエスの声に応じて「沖に漕ぎ出す」こと。立ち上がり、歩き出すこと、理性や経験で囲われた狭い自己に留まっていなくて、試みる。するとどうだろう。肉的に「おびたしい魚がかかり、網がやぶれそうになる(5:6)」。

大漁は漁師やその家族にとって、生の喜びであり、安心であり、希望である。神はイエスを介して、現実の世において、肉的な恵みを与え給う。そしてその肉的な恵みは、絶妙な状況によって、悔い改めを自ずと起こさせる(5:8)。

苦難や懲罰によって悔い改めるのではない。喜びによって、だ。その自然な悔い改めによって、霊的な事柄も実っていく。「彼らは～すべてを捨ててイエスに従った(5:11)」。

「神はノアに言われた。〔これが、わたしと地上のすべて肉なるものとの間に立てた契約のしるしである〕(創世記 9:17)」。霊的な神と世の肉とは「契約」、つまり確固たる約束によって結びついている。

神の契約相手は、人間であると共に地のあらゆる動植物や生命。イエスによる大漁の恵みは、神との契約の中に実現する。この約束において、天の霊と地の肉は分かちがたく結びついている。

「虹」によって神は「永遠の契約」を心に留め(9:16)、私たちは十字架のキリストによって永遠の契約をこの身に受ける。

霊的な生き方は、肉的な生き方と響き合っている。教会の肉的な活動は霊的な奉仕なのだ。



《おまけのひとこと》

霊は私たちが肉の奥へ向かわせる 肉の喜びは私たちが霊的な歩みに導く 食べる私たちが食べられる動植物も 永遠の契約の内に呼吸している 命すべてが生きて死ぬ その日がやって来るまで